

Title	異郷の荷風、魔境の荷風：英語文献と幻想文学との両脈から
Sub Title	Kafū in English and his fantasy
Author	Bernard, Peter
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2019
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.116, (2019. 6) ,p.102 (163)- 112 (153)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	2018年度藝文学会シンポジウム「慶應義塾文学科教授・永井荷風」 開催日: 2018年12月14日 場所: 慶應義塾大学三田キャンパス北館ホール
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01160001-0102

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

異郷の荷風、魔境の荷風

— 英語文献と幻想文学との両脈から —

ピーター・バナード

一、荷風との出会い

まず断っておきますが、私は決して荷風の専門家ではありません。『荷風全集』にまだ読んでいない作品が沢山ありますし、荷風に関する特別な知識を持っている訳ではありません。私は現在、ハーバード大学大学院から慶應義塾に来ておまして、博士論文の執筆に取り組んでおりますが、その研究テーマは日本近代文学における、所謂「田舎ゴシック」論です。もとより幻想文学、ゴシック・ロマンス、怪奇小説といったジャンルに興味があって、泉鏡花、日夏耿之介、佐々木喜善、幸田露伴といった作家を研究対象としております。

この手の文学世界が好きになったきっかけは、と訊かれますと、ちょうど十年前に金沢に留学し、そこで泉鏡花の世界を知り、帰国して英訳で鏡花の作品を読んだという運命的な出会いだった、とよくお答えしますが、実は金沢に留学する前後に、夏目漱石や川端康成とともに最初に読んだ日本近代文学作家の一人は荷風でした。しかも大学二年頃に受講した、日本近代文学通史の授業で最初に書いた論文は、荷風の「牡丹の客」についてでした。その後も、主に英訳で、「あめりか物語」など他の作品も読みましたが、何より鏡花と出会ってから、荷風の文学からしばらく離れてしまいました。

けれども、このシンポジウムを機に振り返ってみましたら、「牡丹の客」の暮れなずむ空、あの黄昏色に染められた情景と心境とが、どこか夢のようで、すみだ川なんぞ見たことのなかった十年前の自分にとって、一種の幻想文学だったの

かもしれません。

二、英語圏における荷風受容

さて、本日は、欧米を旅してその体験を以て「日本語文学」でありながら「日本文学」という枠を超えた作家、永井荷風が、逆に英語圏でどのように読まれ、どのように論じられてきたか、それから一見したところあまり関係のなさそうな永井荷風と近代日本における幻想文学史との関わりという二つのテーマについて考えてみたいと思います。違う言い方にしてみれば、翻訳という行為が生む幻想性と、永井壯吉という編集者が生んだ幻想性の相互性について考える試みとなればと思います。

まず荷風文学の英訳の歴史に目を向けてみたいと思いますが、資料として現存の英訳をリストアップしてみました。

永井荷風作品英訳一覧

(同じ訳者による再版・改訳などを略し概ね初出のみを記した。国際交流基金・日本文学翻訳書誌検索データベースを訂正・補足したものからなる。)

1914 年

狐 “The Fox,” Asataro Miyamori 訳 , in *Representative Tales of Japan* (Tokyo: Sanseido)

1918 年

掛取り “The Bill-Collecting,” Torao Taketomo 訳 , in *Paulownia: Seven Stories from Contemporary Japanese Writers* (New York: Duffield)

浮世絵 “Ukiyoe,” Torao Taketomo 訳 , in *Paulownia: Seven Stories from Contemporary Japanese Writers*

1951 年

二人妻 “The Two Wives,” S. G. Brickley 訳 , in *The Writing of Idiomatic English* (Tokyo: Kenkyusha)

1956年

すみだ川 “The River Sumida,” Donald Keene 訳, in *Modern Japanese Literature*
(New York: Grove Press)

1961年

あじさい “Hydrangea,” Edward Seidensticker 訳, in *Modern Japanese Stories*
(London: Eyre & Spottiswoode)

歓楽 “Pleasure,” Ryōzō Matsumoto 訳, in *Japanese Literature, New and Old*
(Tokyo: The Hokuseido Press)

1963年

腕くらべ *Geisha in Rivalry*, Kurt Meissner 訳 (Rutland, Vermont: Charles E. Tuttle)

1964年

雨瀟瀟 “Quiet Rain,” Edward Seidensticker 訳, in *Japan Quarterly* 11.1

1965年

すみだ川 “The River Sumida,” Edward Seidensticker 訳, in *Kafū the Scribbler: The
Life and Writings of Nagai Kafū, 1879–1959* (Stanford: Stanford University Press)

牡丹の客 “The Peony Garden,” Edward Seidensticker 訳, in *Kafū the Scribbler*

風邪ごち “Coming Down with a Cold,” Edward Seidensticker 訳, in *Kafū the
Scribbler*

大窪だより “Tidings from Okubo: Excerpts,” Edward Seidensticker 訳, in *Kafū the
Scribbler*

腕くらべ “Rivalry: From Chapter 12,” Edward Seidensticker 訳, in *Kafū the Scrib-
bler*

墨東綺譚 “A Strange Tale from East of the River,” Edward Seidensticker 訳, in
Kafū the Scribbler

勲章 “The Decoration,” Edward Seidensticker 訳, in *Kafū the Scribbler*

踊子 “The Dancing Girl: Chapter 10,” Edward Seidensticker 訳, in *Kafū the Scribbler*

買出し “The Scavengers,” Edward Seidensticker 訳, in *Kafū the Scribbler*



1968 年

掛取り “Bill-Collecting,” Roland A. Lange 訳 , in *Journal Newsletter of the Association of Teachers of Japanese* 52

1986 年

裸体 “Nude,” Mark A. Harbison 訳 , in *The Mother of Dreams and Other Short Stories* (Tokyo: Kodansha International)

1994 年

つゆのあとさき “During the Rains,” Lane Dunlop 訳 , in *During the Rains & Flowers in the Shade: Two Novellas* (Stanford: Stanford University Press)

ひかげの花 “Flowers in the Shade,” Lane Dunlop 訳 , in *During the Rains & Flowers in the Shade*

狐 “The Fox,” Lane Dunlop 訳 , in *Autumn Wind and Other Stories* (Tokyo: Tuttle Publishing)

2000 年

あめりか物語 *American Stories*, Mitsuko Iriye 訳 (New York: Columbia University Press) (1999 年に *American Diary* として同訳者に訳されているが、2000 年版 *American Stories* を決定版とする。)

2001 年

墨東綺譚 “The Other Shore of the Sumida: A Romantic Narrative of Kafū the Recluse,” David Charles Earhart 訳 , in *Iyami, the Subversive Voice in the Wartime Writings of Nagai Kafū* (Ph.D. diss., Washington University)

おもかげ “Enduring Images,” David Charles Earhart 訳 , in *Iyami, the Subversive Voice in the Wartime Writings of Nagai Kafū*

女中のはなし “The Maid’s Story,” David Charles Earhart 訳 , in *Iyami, the Subversive Voice in the Wartime Writings of Nagai Kafū*

羊羹 “Bean-Cake,” David Charles Earhart 訳 , in *Iyami, the Subversive Voice in the Wartime Writings of Nagai Kafū*

腕時計 “The Wristwatch,” David Charles Earhart 訳 , in *Iyami, the Subversive Voice in the Wartime Writings of Nagai Kafū*

秋の女 “Autumn Woman,” David Charles Earhart 訳 , in *Iyami, the Subversive Voice in the Wartime Writings of Nagai Kafū*

2002 年

吾妻橋 “Azuma Bridge,” Lawrence Rogers 訳 , in *Tokyo Stories: A Literary Stroll* (Berkeley and Los Angeles: University of California Press)

2005 年

黄昏の地中海 “The Mediterranean in Twilight,” Mitsuko Iriye 訳 , in *The Columbia Anthology of Modern Japanese Literature, Volume 1: From Restoration to Occupation, 1868–1945* (New York: Columbia University Press)

2007 年

腕くらべ *Rivalry: A Geisha’s Tale*, Stephen Snyder 訳 (New York: Columbia University Press)

2014 年

花火 “Fireworks,” Stephen D. Carter 訳 , in *The Columbia Anthology of Japanese Essays: Zuihitsu from the Tenth to the Twenty-First Century* (New York: Columbia University Press)

2017 年

岡の上 “Hilltop,” Stephen Snyder 訳 , in *A Tokyo Anthology: Literature from Japan’s Metropolis, 1850–1920* (Honolulu: University of Hawai’i Press)

2018 年

監獄署の裏 “Behind the Prison,” Jay Rubin 訳, in *The Penguin Book of Japanese Short Stories* (London: Penguin Classics)

ここで注目したいのは、英語圏における二つの荷風ブーム、ということです。荷風が1959年に亡くなる前にも英訳が存在しますが（この点ではドナルド・キーン訳の「すみだ川」がキーンの画期的なアンソロジー *Modern Japanese Literature* に入っていることを特に注目すべきかもしれません）、荷風が亡くなって1960年代に入ってから荷風の英訳が本格的に現れ始めます。

この事情には、いくつかの理由が推測されます。まず、亡くなったという事実が促す再評価ということがあったのでしょうか。それに1960年代は日本文学の英訳作業の紛れもない黄金時代で、ドナルド・キーン、エドワード・サイデンステッカー、アイヴァン・モリス、ジョン・ネーサンといった翻訳家の活躍のおかげで谷崎潤一郎、川端康成、三島由紀夫、それから時代が少し下っては大江健三郎や安部公房らが英訳を通して英語圏における紹介を得た時代です。

しかし荷風はこういった作家たちとは基本的に異なった状況にあった存在だったように思います。というのは、谷崎、川端、三島らは、キーンやサイデンステッカーと実際に交流を持って自分の作品の中から英訳して欲しいものをすすめていたりしていましたが、先程確認したように、1960年代に荷風はすでに死んでいます。この点においては、「明治の文豪」といえる他の作家と比べると、荷風は漱石と鷗外に負けずに、かなり紹介されている方です。例えば鏡花の場合は、本格的に紹介され始めたのは1990年代です。

これはなぜかとまた考えてみますと、翻訳作品のセレクションからもその匂い分かるかもしれませんが、「日本らしい日本作家」としての荷風、つまり「芸者」とかのジャポニズムに当て嵌まる荷風像を容易に作り出すことができたのではないかと思います。

それから30年間余りが経って21世紀に入ってから、第二の「荷風ブーム」がどうも来ているようで、その先駆けに「あめりか物語」の英訳があります。

現代の、つまりまだ生きている作家は別として、近代の作家の場合、翻訳のブームと研究のブームが大体手をつないで訪れるので、次に英語圏における荷風研究の主な文献を見てみたいと思います。これは完全な参考文献ではなくて代表的

なもののみをピックアップした紹介にとどまることを断っておきます。

永井荷風英語圏研究略誌

1965 年

Edward Seidensticker, *Kafū the Scribbler: The Life and Writings of Nagai Kafū, 1879–1959* (Stanford: Stanford University Press)

2000 年

Stephen Snyder, *Fictions of Desire: Narrative Form in the Novels of Nagai Kafū* (Honolulu: University of Hawai'i Press)

2001 年

David Charles Earhart, *Iyami, the Subversive Voice in the Wartime Writings of Nagai Kafū* (Ph.D. diss., Washington University)

2011 年

Rachel Hutchinson, *Nagai Kafū's Occidentalism: Defining the Japanese Self* (Albany: State University of New York Press)

Christophe Thouny, *Dwelling in Passing: A Genealogy of Kon Wajirō's 1929 New Guidebook to Greater Tokyo* (Ph.D. diss., New York University)

2017 年

Gala Maria Follaco, *A Sense of the City: Modes of Urban Representation in the Works of Nagai Kafū* (Leiden: Brill)

英語圏における荷風研究の論点をまとめようとするとおそらく、荷風は伝統的なのかそれとも近代的（つまりモダニスト）なのか、という軸と、荷風と都市文化、つまり荷風とアーバニズムという軸とが二つの大きな論点になっています。

21 世紀に入ってから荷風研究がだんだん多様になりつつある気がしますが、

それ以前はやはり翻訳においても研究においてもサイデンステッカーの存在が最も大きかったと言っても過言ではないでしょう。

サイデンステッカーは言うまでもなく、古典では「源氏物語」や「蜻蛉日記」、近代では谷崎の「細雪」や川端の「雪国」などの英訳者で、キーンとともに英語圏における日本文学像を作り上げた一人ですが、その沢山の英訳の中でも、研究書兼翻訳集 *Kafū the Scribbler: The Life and Writings of Nagai Kafū, 1879–1959* がサイデンステッカーの仕事の一つの頂点であるという声は、せめて前世代のアカデミズムの中では、少なくありませんでした。

Kafū the Scribbler の序文でサイデンステッカーは荷風を次のように位置づけています。

This book is based upon two assumptions: that it is possible for an author to be better and more important than any one of his works; and that it is possible for an author to have a certain universal appeal and yet be so firmly attached to a particular setting as to make a knowledge of that setting essential to a complete awareness of the appeal. It follows that a general survey of the writing, together with representative bits and snatches from it, and a description of the setting are necessary if the new reader is to be properly introduced. No single book may seem worthy of translation, and yet the author and his setting may seem worthy of a book.

It is my feeling that Nagai Kafū is such an author. (Seidensticker, *Kafū the Scribbler*, p. v)

評伝としては何だか奇妙な始まり方と言っても良いでしょうが、サイデンステッカーならではの率直なこの表現から、*Kafū the Scribbler* でサイデンステッカーが荷風をどのように評価し紹介しているかが分かります。

まず上記の文章から明らかだと思いますが、サイデンステッカーは基本的に、荷風を「傑作」を書いた作家としては認めていません。つまり、作家の人物像から離れた、特定の作品のテキストに、全作品のどの作品にしても大した価値はない、という消極的なスタンスです。そのためサイデンステッカーは純粋な作品論研究のアプローチに興味はなくて、「works」(作品)・「author」(作者)・「setting」(場所的背景) という三つの要素がいかに「荷風」という言説の場で接点するか

ということに興味を持っているのです。この三つの要素の接点の仕様こそが、サイデンステッカーにとって検討すべき新たなテキストとなっているのです。

このような、作品論兼作家論兼風景論兼翻訳集というアプローチは、今でも大変珍しく感じますが、例えばおおよそ同じ頃にエドウィン・マクレランが漱石の「こゝろ」をいかにも「近代文学の堂々たる傑作」として紹介した様子と全く異なります。

このような荷風受容は、英語圏においては長らく続きましたが、私自身にとってはどうも、評伝的な「人と作品」のようなアプローチから一步離れた、小説の妙なうねりを持つ形式美を撫でるような読み方が魅力的、そして刺激的に感じます。「墨東綺譚」だけではなくて他の作品もそうですが、荷風のナラトロジーは、あたかも「物の語り方」を語る物語とでも言えるようなところがあって、読むにつれてそれをなぞるような感覚がとても愉快に感じます。

三、永井壯吉編集長時代の『三田文學』の幻想性

『三田文學』135号の特集で書かせていただいた文章は、そのようなナラトロジーの側面から、「来訪者」という比較的論じられていない作品の内容的のみならず形式的な面白さを考察しようとしたものでした。「来訪者」に関心を持ったきっかけは、東雅夫氏のアンソロジー『文豪怪談傑作選・昭和篇 女霊は誘う』（筑摩書房、2011年）に「来訪者」が収められていてそこで初めて出会ったということです。そのおかげで荷風を幻想理論のようなアプローチから考えるのも可能だと気づきました。そして「来訪者」は読めば読むほど怪しさが滲み出る作品なので、その結果『三田文學』で「来訪者」の怪奇性について寄稿させていただくことになって、結論として「荷風は吸血鬼小説も書いた！」みたいな、随分「こじつけ」めいたところに辿り着きました。

作家としての荷風と幻想文学との関係に限るのでしたら、選択肢はやはり「来訪者」ぐらいかもしれませんが、もう一つの側面、つまり編集者としての荷風と幻想文学との関係に至っては別問題です。それでまた「こじつけ」の結論に飛んでしまいますと、荷風が編集長として携わった時期の『三田文學』は、後藤宙外が編集長として携わった時期の『新小説』と並んで、近代日本における最初の幻想文学雑誌の一つと言えるのではないかと思います。

そもそも「幻想文学」の定義は案外難しく、超自然主義より広げて「雰囲気」が幻想的という作品も視野に入れてしまいますと、世紀末的な耽美主義や反自然主義、象徴主義といった運動との区別もまた難しいのは事実です。が、やはり特定の言説空間を考える際には、例えば「幻想文学」と「耽美派文学」とは異なる意味合いを持ってそのため異なった「読み」を可能とするのではないかと思います。

ということで、終わりに提案したいのは、荷風が編集した『三田文學』は幻想文学雑誌として十分読み得ることです。時間の制約もありますので、その統計的な総論を割愛する代わりに、『三田文學』の幻想派として評価すべき存在の一人、山崎俊夫に最後に目を向けてみたいと思います。

荷風時代の『三田文學』と幻想文学といえば、まず泉鏡花の「三味線堀」（明治43年10月号）と「朱日記」（明治44年1月号）の両テキストの存在が大きいです。とりわけ「朱日記」は最近、中川学氏によって絵本化もされて注目を集めている鏡花作品の一つと言って良いでしょう。しかし、山崎俊夫はごく限られた文脈に封じ込められた存在のように思います。（わずかなる再評価と言いますと、生田耕作の編集・校訂で1980年代から1990年代にかけて奢瀨都館より刊行された、全五巻の『山崎俊夫作品集』は貴重な書物です。）

山崎俊夫はまさに荷風が慶應義塾で教鞭を執っていた時代に在籍していた塾生であり、おそらく荷風の文学に憧れて慶應義塾に進学した人物と思われます。そして大正2年に、まだ学生でありながら初めて『三田文學』に小説を掲載します。荷風編集長時代に『三田文學』誌上に発表した作品は下記の通りです。

永井壯吉編集長時代『三田文學』における山崎俊夫発表作品一覧

大正2年1月号 「夕化粧」

大正2年5月号 「童貞」

大正2年9月号 「鬱金桜」

大正3年5月号 「切支丹伴天連」

大正3年10月号 「きさらぎ」

（この後も『三田文學』に作品を発表し続ける。）

この作品群の中で、やはり「童貞」が代表作らしいものとなるでしょうが、「童貞」は要するに両性具有者が主人公という設定で、文体にしても内容にしても耽美と幻想との境界線をさまよう作品です。

荷風と山崎俊夫は例えば、『日本幻想作家事典』（東雅夫・石堂藍編、国書刊行会、2009年）のような事典に記録されていません。が、荷風の『三田文學』が、山崎俊夫のような濃厚な幻想性を有する作家を輩出したのは確かです。山崎俊夫以外にも、例えばM. R. ジェイムズの幽霊小説の日本語訳にも取り組んだ作家、畑耕一が、大正2年2月号、つまり山崎俊夫が初めて載った次の号に「怪談」という小説を寄稿しています。

荷風編集長時代の『三田文學』の幻想性、怪奇性、ゴシック性、それから荷風とこれらの作家との実際の関わりについてはまだ不明な点が多くて、今後の研究の課題にしたいと思います。

それにしても、サイデンステッカーの求める「場所的背景の認識」が荷風文学の受容に確かに有意義となる場合があっても、「場所的背景の認識」を動揺させて相対化させてくれる幻想の文脈から荷風を読む行為もまた有意義でしょう。晩年の作品「来訪者」の抑え切れない怖さにしても『三田文學』によって荷風が発表の場を与えた新人幻想文学者にしても、ノンシャランな荷風散人の裏に、もっとワイルドな一面も潜んでいるに違いありません。荷風の「異郷」は、偏奇な西洋趣味やお江戸のノスタルジアにとどまらないで、悪魔の囁く「魔境」をもきくと含んでいたのでしょう。

それではこのあたりで終わりにしたいと思います。ご静聴、誠にありがとうございました。